

緋色の軌跡

断頭台

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

七耀暦1204年。

最強の獵兵団の一角に所属していたある少年は数奇な運命の導きの元、ツールズ士官学院に入学することに。

獵兵だった頃に比べ色々と制約に縛られることが多く、不自由をしながらも同じ仲間《Ⅶ組》のメンバーたちと帝国の問題へと立ち向かうことになる。

※別のサイトですが、同じタイトルの軌跡二次があるそうなので、再び変更します。読んでくださっている方々にはご迷惑をお掛けすること申し訳ないです。タイトル及びあらすじ変更しました。元《紅の軌跡》です。読みは『ひしよくのきせき』でお願い

します。

目次

序章 トールズ士官学院

a c t 0 1 | 1

a c t 0 2 | 13

a c t 0 3 | 24

a c t 0 4 | 34

a c t 0 5 | 41

第一章 初めての實習

a c t 0 6 | 53

a c t 0 7 | 64

お知らせ | 77

序章 トールズ士官学院

a c t 0 1

3月31日 トリスタ駅

ライノの花が舞う街の中緑や白の制服を着た少年少女たちが行き来するのがよく見える。彼らが着ているのはここ、トリスタにあるかの有名なドライケルス大帝が創設したとされている軍学校『トールズ士官学院』の制服である。白色は貴族、緑色は平民と制服の色で区別されているのだ。

そんな中、一つの異色の色：『赤色』の制服を纏った生徒たちが数名見受けれる。作りはトールズ士官学院と同じものであることから、士官学院の生徒なのだろうが、如何せん誰も赤色の制服があるなんて聞いたことがなかった。勿論、この街に住んでいる人々も今日以外に今まで見たことが無いようで、好奇の視線で赤の制服を纏った少年少女を見ている。

そして、同じく異色の赤の制服を纏った藍色の髪の少年——『クリアールヴィルハイム』も好奇の視線にさらさられていた。

「……なんか異様に見られてんなー。別に気にはならないけど」

街の人々や他の平民や貴族の生徒が送る好奇の視線を気にした様子もなく、トールズ士官学院がある方へと歩いているのだが、彼が目立っているのはその異色の赤色の制服だけ、と言う訳ではない。

彼が肩にかけて背負っている物々しいトランクも彼を目立たせている要因の一つだろう。身の丈の半分くらい位の大きさもある。そして何よりも目を引くのは赤い蠟のステッカーが貼ってあることだろう。

そんなトランクを持つているわけだから周りの赤色の制服を着ている生徒よりも目立っているわけだ。……本人はほとんど気にしていないが。

「だるくなってきたサボるか? ……『とう。』ぐほお!？」

トールズ士官学院に近づくにつれてそんなことを考えていると背後から気の抜けた声が聞こえたかと思うとクリアの背中に物凄い衝撃が走った。

「……フィー、てめえ」

「や。」

ピクピクとこめかみを引きつらせながら後ろを見ると全く悪びれた様子もないクリアと同じく赤色のトールズ士官学院の制服を着た白髪の小柄な少女がいた。

彼女の名前は『フィー』クラウゼル。クリアとは此処、士官学院に来る前に何度か会っており、一時期は、『ある人物』とともに行動したこともある。その『ある人物』と

はクリアとフィーがこの士官学院に来ることになったきっかけを作った人でもある……らしい。

「背中に突撃したことはまあ、百歩譲って許してやる。……けどな」

「？ なに？」

「なんで背中に乗ってんだよ！ 重いだろぅが!!」

「疲れた。連れてって」

「俺はてめえの乗り物か!？」

背中に飛び乗ってさっさと行くように催促してくるフィーに最初はこめかみに青筋を浮かべて苛立っているようだったが、諦めたのか深いため息を吐くと両手を後ろに回してフィーの体を支えるようにし所謂おんぶの状態でフィーとともに学園に行くのだった。



「——最後に君達に一つの言葉を贈らせてもらおう。本学院が設立されたのはおよそ

220年前のことである。創立者はかの“ドライケルス大帝”——“獅子戦役”を終結させたエレボニア帝国、中興の祖である。——即位から30年あまり。晩年の大帝は、帝都から程近いこの地に兵学や砲術を教える士官学院を開いた。近年、軍の機甲化と共に本学院の役割も大きく変わっており、軍以外の道に進む者も多くなつたが……それでも、大帝が遺した“ある言葉”は今でも学院の理念として息づいておる。”

トールズ士官学院の講堂で学院長——ヴァンダイクが壇上から生徒たちに語りかけるように話し出す。不思議と生徒たちがヴァンダイクの話を真摯に聞いている。『若者よ——世（よ）の礎（いしずえ）たれ。』“世”という言葉をどう捉えるのか。何をもつて“礎”たる資格を持つのか。これから2年間で自分なりに考え、切磋琢磨する手がかりにして欲しい。——ワシの方からは以上である。』

ヴァンダイクのその言葉で入学式は締めくくられ、各生徒たちは入学案内状に書かれた振り与えられたクラスのある教室へと向かつていく中、赤色の制服を着たクリアを含む生徒たちは戸惑っていた。

何故なら彼らの入学案内状にはあてがわれるクラスが書かれていなかったからだ。生徒たちも不審に思っているのか周りの生徒に聞いているそんな中、クリアはというと

……

「……………」

寝ていた。

「え、えーつと……起こさなくていいのかな？」

「別にいいと思う」

「に、入学式で居眠りなんて常識知らずだな」

戸惑ったように茶色の髪の少年が起こさなくていいか聞くが、クリアの隣に座っているファイが即答で起こさなくていいと告げる。メガネをかけた緑髪の少年に至っては呆れている。……が、本人は眠っているためいざ知らずの状態である。

「はいはい！ 赤い制服の子たちはちゅうもーく！ つて、既に赤色の制服の生徒たちだけみたいだけど」

赤い髪のとても教官とは思えないような服装をした女性がそう言つて未だ講堂に残っている生徒たちの視線を集める。……クリアは寝たままだが。

「どうやらクラスがわからなくなつて戸惑つてるみたいね。実は、ちよつと事情があつてね。——君達にはこれから『特別オリエンテーリング』に参加してもらいます。

……つて、アンタは何時まで寝てるつもりよ」

「だっ!？」

寝ているクリアの頭を叩く女性教官。眠りが浅かった為か軽めの叩きで起きたクリア。周りの生徒たちは苦笑をしていたが、ファイだけは呆れたような表情をしていた。

「つたく、入学式で居眠りなんていいご身分ねクリア」

「やー、ちようどいい気温だったからつい…」

「……はあ。まあ、いいわ。で特別オリエンテーリングの場所なんだけど少し歩くから付いてきなさい」

ナハハと頭を掻きながら苦笑するクリアにため息をついて呆れる女性教官だが、気を取り直して生徒たちを先導するように講堂の外に向かって歩き出す。

戸惑いながらではあるが、おずおずとついて行く生徒たち。その中で黒髪の少年と茶髪の少年は突っ立ったままだった。それに気づいたクリアは彼らの方に向かって近づいていき、

「よう、俺らも行こうぜ。さっさと行かねーと置いてかれんぜ」

「あ、ああ。行こうエリオット」

「う、うん……えっと、君の名前は？」

エリオットと呼ばれた茶髪の少年にそう問われて気づいたかのように頬を掻いて苦笑をする。

「あー……言つてなかったな。クリア≡ヴィルヘルム。クリアでいいぜ。宜しくなお二方」

「うん、よろしく。僕はエリオット≡クレイグ」

「俺はリインⅡシユヴァルツァーだ。よろしくなクリア」

互いに自己紹介をし終わつたところで三人を残して既に女性教官と他の生徒達は講堂を出ており、クリアたち三人も慌てて後を追うことになるのだった。



「んじゃ、改めて自己紹介からするわね。サラⅡバレストアイン……貴方たち《Ⅶ組》の担任を勤めされてもらうわ」

全員が案内された旧校舎につくと、女性教官——サラⅡバレストアインはそう言いながら自己紹介をする……が、彼らはそれどころではなかった。なにせ自分たちが聞いたこともないクラスにあてがわれていたのだから。

「な、Ⅶ組？」

「教官、確かトールズ士官学院にはVクラスまでしかないはずでは……」

「あら、流石主席入学。よく調べているじゃない。そのとおり、全5クラスがあつて平民と貴族で区別されていたわ……あくまで去年まで、だけど」

メガネをかけた三つ編みの少女の問いかけに半ば感心しながら答える。緑髪の少年は彼女が主席入学だということに驚いており、他の《Ⅶ組》のメンバーも一目おいていようだった。

「…去年まで、と言うのはどういうことですか？」

「今年から新しくひとつのクラスが立ち上げられたのよねー…それが、すなわち君たち——身分に関係なく選ばれた特科クラス《Ⅶ組》よ」

「特科クラスⅦ組……」

「あの、教官本当に…身分に関係なく？」

自分たちがそんなクラスに割り当てられていたとは知らず殆どの生徒が驚いている。クリアも予想がついていかなかったからか少し驚いているが、フィーに至っては興味がないのかあくびをしている。そんな中

「じ、冗談じゃない!! 身分に関係ない!! そんな話聞いていませんよ!」

緑髪の少年が大声でそう叫ぶ。何事かと思い全員がそちらの方を向くと緑髪の少年は憤怒の表情を浮かべている。

「えーっと、たしか君は……」

「マキアスⅡレীগニッツです それよりもサラ教官! 自分は納得しかねます! まさか、貴族風情と一緒にクラスでやっていけって言うんですか!?!」

「そうは言ってもねえ……同じ若者同士なんだからすぐ仲良くなれるでしょ？」

「そ、そんなわけあるはずないでしょう！ 貴族風情と同じクラスなど……ゴメンだ！」

苦笑しながらなだめようとするサラだが、それも意味をなさずさらに緑髪の少年――

――マキアスⅡレীগニツツはさらに怒りを増した様子で強く言う。

「……フン」

「何がおかしい」

「別に。……ただ、《平民風情》がよく吠えると思っただけだ」

「何？」

金髪の少年の言い方が気に障ったのか、マキアスはさらに表情を険しくする。しかし、それを介した様子もなく金髪の少年はマキアスを見ている。

「……ちよつと、あんたたち」

「これはこれは、どうやら大貴族のご子息殿が紛れ込んでいたようだな。その尊大な態度……さぞ名のある家柄と見受けるが？」

「フン……ユーシスⅡアルバレア。まあ、別に《貴族風情》の名前など覚えてもらわなくともいいが」

「！ アルバレア……《四大名門》の一つじゃないか！」

「東のクロイツェルン州を治めている《アルバレア公爵家》の……」

四大名門を知っている生徒たちは驚いた様子を隠すこともなく啞然としている。……クリアとフィーそれと、長身の男子生徒は頭の上に？を浮かべているが。

「大貴族中の大貴族ね……」

「噂は聞いたことがある……」

「だ、だからどうした！ そんな大層な家名に退くと思つたら大間違いだぞ！ 僕は絶対にッ」

「はい、そこまで！ ……全く、話が進まないつたらありやしないじゃない」

パンパンと手を叩き、注目を集めるサラ。マキアスとユーシスは不服そうにしているが、確かにサラの言うことにも一理あるためか反抗はしない。

「ま、少し、トラブルがあつて遅くなつたけど今からオリエンテーリングは始めるわねー」

「あの、教官……その、オリエンテーリングと言うのは」

「そう言う野外競技があるというのには聞いたことがあるんですけど……」

どんなものかわからない事に困惑を隠せない生徒たちはその目に少し不安を宿している。……若干名を除き、ではあるのだが。そんな中、心当たりがあつたのか黒髪の少年——リインⅡシヴアルツァーは

「……もしかして、門のところまで預けたものと何か関係が？」

「あら、いいカンしてるわね。正解よ♪」

「あー………そういや預けたなあ」

「イヤイヤ、忘れていたの!？」

クリアの忘れていた発言に驚くエリオット。しかし、そんなことを他所にサラはⅦ組の面々から距離を取りそして……

「それじゃ、早速はじめるわね………ま、健闘を祈っておくわ」

ガコンツ

「!」

そんな音を立ててクリアたちⅦ組の足元が大きく傾いたかと思うと、暗闇に誘い込まれるかのように滑り落ちていく他のⅦ組の面々。

クリアのとなりのリインも最初は必死に食い下がっていたが、知り合いなのか金髪の少女が落ちていくのを見ると自らも暗闇の中へと飛び込んでいった。

そんな中、クリアは元々、履いているブーツに仕込んでいたナイフを床の隙間に突き立てて落ちるのを食い止める。因みにフィーはワイヤーを天井の鉄柱に巻きつけて落ちるのを逃れていた。

「……から、あんたたち。落ちてかないとオリエンテーションにならないでしょうが」

「や、だつて結構高さあるだろ? 痛いのはゴメンなんだよ」

「……めんどい」

「あのねえ……」

素直に下に落ちようとしないう二人に表情をヒクヒクと引きつらせて言うサラ。……
これは良くないと思っただのか、クリアはため息を吐いて

「分かったよ。……はあ」

「仕方ない」

「あんたたちが一番ままだらないわねえ。ま、大丈夫だと思っただけど気をつけなさいよ」
その言葉を聞いたのを最後にクリアはフィーを伴って他の《Ⅶ組》のメンバーたちが
落ちていった暗闇の中へと飛び込んでいくのだった。

a c t 0 2

「つと」

Ⅶ組のメンバー達を追うように旧校舎の地下に飛び降りたクリアとフィーは到着したと同時にある光景を見て絶句した。

と言うのも、クリアたちが見たのは、知り合いと思われる金髪の少女を助けるように飛び降りていったリインが彼女の下敷きになっていた。……それだけならばまだいいのだが、問題は彼の顔がある位置である。リインの顔は金髪の少女の発育の良い胸に埋まっていたのだから。

「あいたた……」

「……あの、そろそろどいてもらえると助かるんだが」

「……………ッ!?!」

申し訳なさそうに金髪の少女の下から声を出すリイン。最初は驚いていた少女も次第に自分が置かれている状況がわかって慌てて退こうとしたのだが…彼、リインの顔が自分の胸に埋まっているのを理解すると茹で上がったように顔を真っ赤にして彼から

退き、そして

パシンツ！

「うわっ」

「ヒュー、結構いたそうだな」

リインの頬に思いつきり平手打ちをかましたのだった。その音の痛々しさにクリアの横にいたエリオットはびくりと一瞬目をつぶり、クリアは口笛を吹いて面白そうにしていた。叩かれた当の本人は呆然としているが。

「あ、あはは。災難だったね…リイン」

「ああ、今日は厄日だ…」

そう言つて平手打ちをした少女の法を見るのだが、キツと睨まれたあとふいと顔をそらされた。まあ、今日知り合つた人にそんなことをされてしまえば、誰だつて悄気げる訳で、リインも例に外れることなく肩を落として意気消沈していたのだが、そんな中クリアはナハハと陽気に笑いながら

「何言つてんだよ、どう考えたつて役得じゃねーか。同年代のしかも女子の胸に顔を埋めるなんてことそうそうできないぜ？」

「いやいや!? 確かにそうかもしれないけど!」

「…駄目だ、俺はそんな風に考えることができない…:はあ」

更に肩を落として深い溜め息を吐くりイン。それを必死にだめるエリオットを見てクリアはどっちも苦労人になるんだろうなと割とどうでも良いことを考えていた。それから暫くしない内にクリアたちの制服の中から通信器の着信音が鳴り響いた。その着信音は、入学案内書と今クリアたちが来ている制服とともに送られてきた戦術オペメントと思われるものから出ていた。

『どうやらみんな無事にいるみたいねー。それじゃあ、さくつと説明するからサクツとクリアして来てちようだいね』

「さくつとつて……」

『と言つても、ただこの先の通路をひたすら進んでいたらアンタたちが落ちた上の階に上げられるようになっていいるからそこ目指して進んでもらうつていうだけだね』

「しかし、サラ教官……感じる限り此処には……」

『あら、気配察知に優れているわねー……そ、君が思っているようにその先には魔獣が潜んでいるわ』

魔獣と聞いてエリオットを含むごく少数のメンバーは瞳に不安の色を宿し、ゴクリとつばを飲み込んでいた。サラはソレを見ていたかのように苦笑しながら

『ああ、でも大丈夫よ。アンタたち程度の実力があつたら別に別に問題なし。ソレに素敵なプレゼントもあるしね』

「プレゼント？」

『ま、それは見てのお楽しみってことで』

サラがそう言った瞬間、今まで薄暗かった広間に光が灯って周りが見やすくなった。クリアたちは辺りを見回すと、端にクリアたちが学院の校門で預けた『荷物』と小さい箱が置いてあった。恐らく、サラの言う『プレゼント』と言うのは小さい箱のことだろう。

『校門で預けた荷物と今アンタたちが手に持っているであろう《ARCS》にはめる事で導力魔法が使えるようになるマスタークォーツをプレゼントしておいたから、ちやっちやとはめて戻ってきなさいよ』

「あ、あの！ 教官！もしかしてこの…」

『ARCSね。財団とラインフォルト社が合同で開発した次世代の戦術オーブメント機…導力魔法が使えるようになるだけじゃないんだけど、その他の機能はまあ…追々ね』

ラインに平手打ちをした金髪の少女が少し表情を強ばらせながらサラに問う。サラがそう答えると、金髪の少女は小さな声で『やっぱり…』と呟いたが、周りには聞こえていなかったように彼女の一言に反応するものは誰もいなかった。

『ま、そういうわけだからさっさと登ってきて頂戴。このオリエンテーリングが終わったら文句でもなんでも聞いてあげるわ。…なんなら、ほっぺにチューでもいいわよ』

♪

「マジで!？」

「アンタはダメよ」

「そんな馬鹿な……」

ほっぺにチューの件で嬉々としてクリアはそう言うが、平淡な声でダメ出しをされてガクリと肩を落として見るからにシヨックですというふうな雰囲気を出すクリアに周りのメンツは多くが苦笑していた。……残りのごく少数は呆れるか、ジト目で彼を睨んでいるかのどちらかであったが。



『よし、みんな《ARCS》にクオーツをセットしたわね？ んじや、今から特科クラス《VII組》のオリエンテーリングを開始するわ 気長に待ってるから頑張って頂戴』

各自が自分の荷物が置いてあるところに向かい、《ARCS》に箱に入っていたクオーツをセットし、準備を整えた所でサラからの通信は切れた。

が、少し、不安があるのか中々奥の通路の方へと誰も進み出さない。……クリアはまだ、さっきのサラの発言にダメ発言のダメージが響いていてそれでどころで、暗いオーラを身に纏って落ち込んでいる。……どれだけシヨックだったのかは語るべくも無いようだ。

「ふん……くだらん。こんな茶番はそうそうに終わらせるに限る」

「ま、待て！ 一人で行くつもりなのか!？」

「何だ、それがどうかしたのか？」

「魔獣が出るんだぞ！ もう少し慎重に……」

ユーススが一人で奥に行こうとするのをマキアスが止める。しかし、それを気にしたふうもなく、少しめんどくさそうにユーススは

「だからなんだ。魔獣如き街の外に出ればいくらでもいるだろう。そんなものに怯える必要など俺にはない。……まあ、平民風情であろうと怖くて進めないというのなら、俺が守りながら連れて行ってやってもいいが？ 《貴族の義務ノブレス・オブリージュ》……力なき民を守るのも貴族の勤めだ」

「はあー、格好良いねえ……んじや、力なき民の俺は守ってもらおうかねえ……でっ!?」

「ふざけていないで、さっさと行く準備しなよ」

「なんだと……その見下したもの言い……どこまで言っても気に食わないな君はッ！君に守ってもらふ必要などない！ 旧態依然とした貴族に負けるものか！」

ユーシスの物言いに激昂したマキアスは一人奥の方へと進んでいく。サラのダメ発言から立ち直ったクリアはなんのプライドもなくユーシスに守ってもらふ発言をしたのだが、即時フィーによつて思いつきり脛を蹴られる。

「フン……阿呆め」

とマキアスの背中を見ながら眩き、彼の後を追うようにユーシスも奥の方へと進んでいった。その直後に青い髪の少女が顎に手を当てながら

「ふむ……そなたら、私と共に行動しないか？」

「私たち？」

「ああ、一人で行動するよりも、そちらの方が良いだろう。そなたも一緒……」

青髪の少女がフィーに言いかけたが、フィーはそれをワザと無視して一人奥の方へと進んでいく。……その様子に三つ編みの少女と金髪の少女は苦笑していた。

「ふむ、まあ後に合流すればよいだろう。行くのでしょうか」

「そうね」

「はい、足でまといにならないように気をつけますね」

そう話しながら少女たちも奥の通路の方へと向かつて進んでいく。その際、リインと

金髪の少女がすれ違う時に彼女はリインを睨んだあと、ワザと鼻を鳴らして彼の横を通り過ぎる。そんな行動を取られてしまえば、人の良いリインはしよげてしまうわけで、案の定肩を落としていた。クリアは女の子がするような行動ではないよな、なんてことを考えていてあまりリインの方に思考はいっていなかったが。

で、残ったのがクリアを含めて四人。クリアにリイン、エリオット、そして長身の少年である。

「えーっと、僕らも行こっか？」

「そうだな。……君も一緒に行かないか？」

「俺か？」

「ああ、リイン＝シユヴァルツァーだ。よろしく」

きよとんとしている少年にリインは自己紹介をする。それに続くようにクリア、エリオットと続いた。すると、長身の少年も微笑みながら

「ガイウス＝ウオーゼルだ。よろしくしてくれると助かる」

「おう、よろしくなーガイウス」

「うん、よろしくねガイウス」

互いに握手をしたあと、連携をとるために自分の武器を紹介しようということになった。各々トランクや包みを開けて武器を取り出す。

「まずは俺からだな」

「……十字の槍？」

「ああ、故郷にいた時から使っていたものでな。足でまといにはならないだろう」

「なんつーか、様になってんなあ」

「ふふ、そう言ってもらえると嬉しいな」

照れくさそうに微笑むガイウス。危うげもなくソレを扱うところを見ると相当な使い手でもあるだろうなと考えながらクリアは笑っている。

「じゃ、次は僕だね。これ、なんだけど……」

「…見たことも無いものだな帝国の最新の武器か？」

「俺も見たことないな……」

「必修の武術で使用するもので、あつただけど…魔導杖らしいよ？　まだ、うまく扱えるかわからないけど」

まあ、頑張つて見るよと言って苦笑している。クリアも魔導杖の存在は知らなかったし、どんなものかもわからないので内心どんな戦い方をしてくれるのか興味を持っている。…自分が使うとなれば話は別だが。

「んじゃ、まあ俺かね」

そう言いながらクリアは蠍のステッカーがついたトランクから武器を取り出す。が、

その誰もがクリアの武器を見て驚いていった。まあ、見た目がそこそこ厳ついのでそれは仕方がないことだろうとクリアは一人結論づける。

「それはまた、凄いな……」

「そうか？ まあ…見慣れてっからそう感じるだけか」

「銃剣、になるのかなソレ？」

「ま、そだな。俺らはブレードライフルって言ってたけど、一応んな感じのだ。ちよいと特別製だけどな」

片手で持ち上げたソレ…ブレードライフルの銃身を軽くコンコンと叩きながらそう言うが、見た目に圧倒されているようでクリアのブレードライフルに皆釘付けになっている。

「さて、最後はリインだぜ？」

「あ、ああ。俺のはこれだな…」

そう言つてリインは腰の鞘から刀身を出す。見事に打ち鍛えられたその刀身は美しい、その一言であつた。クリアもその刀身を見て「へえ…」と声を上げている。

「それって剣？」

「帝国のものとは違うようだが……」

「——刀だな」

「ああ……知っているのか？」

「……ま、そんなとこだな」

苦笑しながら言葉を濁すクリアにリインたちは疑問を抱きながらもそれを口にする
ことはなかった。それもそのはず、これから共に過ごして行くと言っても今はあつたば
かりだ。それなのにあまり喋りたそうに無いことを根掘り葉掘りするの自分にとつ
ても相手にとつてもあまりいいものではないとわかっているからだろう。

「刀って……？」

「ああ、ちよつと切れ味が良くてな。扱いが難しいんだ……俺もまだまだだよ」

「えー？　すごく様になってるんだけどなあ」

「ふふ、そうだな。それにかなり綺麗な刀だ」

「そうかな？　でも、ありがとう……さて、他のメンバー立ちに比べたら結構出遅れてい
るし、そろそろ行くでしょう」

リインが刀を鞘に収めながらそう言う。クリアたちも異論はないようで、みんな頷い
て奥の通路の方へと歩いていく。が、一人クリアは

(ドーせ、サラさんのことだから最後に面倒な仕掛けか何かあんだろうなあ……)

と考えながらリインたちと歩いていくのだった。……そして、奇しくもそのクリアの
予想が当たってしまう事になるとは、クリア本人も思いもしなかった

a c t 03

「おらよつと……取り敢えず、コイツで最後か」

「ああ、みたいだな」

「あ、あはは、流石だね三人とも。ついていくのに精一杯だよ」

最初落ちた（というか落とされた）広間から続いていた通路を進んでいると、サラが言っていたように魔獣が徘徊しており、それを倒しながら進んでいるのだが、戦闘に慣れていないエリオットは既に息を切らしながらクリアたちに何とか食らいついでいる状態であつた。

「大丈夫かエリオット？ 少し、休憩しようか？」

「うん……はあはあ、そうしてもらえると助かるかも」

「ふう……いったいどれくらい進んだんだろうな？ 似たような道ばかりだからよく分からないが」

「まだまだあるんじゃないの？ 結構な高さから落とされてんだからよ」

座り込んでいるエリオットの周りを囲むようにクリアたちが立っているが、エリオット同様で慣れない戦闘が多かったためかラインやガイウスもエリオット程ではないが、

少し息を切らせて汗も掻いている。…クリアに至っては息も切れておらず、汗も掻いていないのだが。

「それはそうと、クリアは凄いな…」

「…なんだよいきなり」

「いや、さっきの戦闘もそうだけどさ、俺らのサポートしながら戦闘してただろ？ 俺ら以上に動き回っているっていうのに全然疲れているように見えなからさ」

「あー…まあ、スタミナには自信があるからな。ソレに、ちよいと厳しい環境で育ってきたからお前らよりも動けるだけだつての…あんま実力的には変わんねーさ」

頬を掻きながら苦笑するクリア。実際的には実力的にもそこそこ差があるのだが、クリアはあえてそれを言うことを控えた。別に落ち込んだりはしないだろうが、念のためである。それに、クリア自身あまり学院に来る前のことを誰彼においそれと話したくはないのである。

「そうなんだ…：…うん、もう大丈夫。ゴメンね時間とらせて」

「気にすんなつて。チーム組んでんだ、そこら辺は遠慮せずに行こうぜ？」

「はは、そうだね。ありがとう」

クリアが言った言葉に照れくさそうに笑うエリオット。しかし、彼の後ろには魔獣が彼に狙いを定めていた。ソレにいち早く気づいたラインがエリオットに向かって

「エリオット！ 後ろだつ!!」

「え？ う、うわああッ！」

「ちいっ！」

完全に油断していたエリオットめがけて飛びかかってくる虫型の魔獣の攻撃はエリオットを押しつける形でその場から移動させブレードライフルで虫型魔獣の攻撃を間一髪でクリアが防ぐ。しかし、彼の両手が塞がっている今の状況では虫型魔獣に友好的なダメージを与えることができない。

そんな中、ラインたちの背後から一筋の閃光が飛んでいき虫型魔獣に直撃し、体制を崩す。そこにすかさずクリアは手に持っていたブレードライフルで魔獣の息の根を止める。

「良かった……大丈夫だったか？」

「おう、助かったぜ……えーっと、確か……」

「マキアスレীগニッツだ。……先程はすまない少し頭に血が上っていたようだ」

魔獣の体制を崩す一撃を放った正体は先ほどの広間でユースと揉めていたマキアスだった。ラインたちもすぐにクリアの下に駆けつけて怪我はしていないか聞いてくるが、クリアは問題ないと返す。

「クリア＝ヴィルヘイム……さっきは本当に助かったぜ」

「エリオットⅡグレイブだよ。よろしくね」

「リンⅡシュヴァルツアード。よろしく」

「ガイウスⅡウォーゼルだ」

それぞれ自己紹介が終わったところでマキアスが申し訳なきようにクリアたちを見ながら何かを言おうとしているが、どこか躊躇っているようにも見えた。それが気になったクリアはそれを促すと、マキアスは言いにくそうに

「すまないが、君たちの身分を確認させてもらってもいいだろうか。：一応、貴族かどうか知っておきたくてね。ああ、別にそれで対応を変える訳ではないんだ。ただ、念の為に確認しておきたくてね」

「俺はそんな上品な血を持った覚えはないね」

「僕も、平民だけど………」

「俺は元々留学生としてやってきているし、貴族とやらがどんなものかあまり分からないな」

「そうか……」と少しホツとしたような表情でマキアスはそう呟く。そして、残りの一人：リンを見ると自然とクリアたちもリンの方へと視線が行く。当の本人はどこか複雑そうに目を閉じると

「————— 少なくとも高貴な血の生まれではないことは確かだ」

(? 少なくとももつてのはどういふこつた?)

ラインの言い回し方が引つかかったクリアだが、周りの者たちはその事に気付いた様子は無い。恐らく、彼の言い回しが引つかかったのはクリアだけだろう。：ただ、確証が無いためただの気のせいかもしれない。かと言って本人にそこまで立ち入ったことを聞くのはクリア本人としてもあまり好まない。なにせ、自身が立ち入られることを好まないからだ。

「ま、取り敢えず進むとしようぜ? この調子じゃ日が暮れても文句言えねーからな」
「あ、ああ。そうだな、そろそろ行こう」

難しい表情をしていたラインはクリアの促す声に我に返りそう言う。その様子にエリオットたちも少し訝しげに思っていたが、特に問題はなさそうだと判断したのか、特にそのことについて聞こうとせず、前を歩くラインについていくのだった。



「おつと…」

「ああ、そなた達か…その様子だとそなたの方も頭が冷えたようだな」

「ああ……その件に関してはすまない。この通り頭も冷えたよ」

魔獣を倒しながら進んでいると、クリアたちは女子のチームと遭遇した。マキアスは場の空気を悪くしたことを申し訳なきように謝るが、青色の髪をポニーテイルにした少女が代表して

「もう済んだことだ。次から気をつけてもらえればいい」

と言いながら、優しく微笑んだ。マキアスはほっとしたように安堵のため息をこぼしていたのだが、その横で金髪の少女がリインを鋭い目つきで睨んでいた。：勿論リインはその視線にたじろいで何も言えずにいる。それを見かねたクリアが助け舟を出すかの如く

「あー、そういうやあんたらの名前聞いてなかったな。俺はクリアⅡヴィルヘイムだ」

「……ふむ、そう言えばそうであったな。私はラウラⅡSⅡアルセイドだよろしく頼む」
クリアの意図が分かったのか金髪の少女：ラウラもクリアに続く形で自己紹介をはじめ。リイン、マキアス、エリオットは彼女のファミリーネームを聞いたことがあるようで目を見開いていたが、帝国の外から来たクリアとガイウスは首を捻って疑問を抱いているような表情をしていた。

その後も互の自己紹介が続いていったのだが、問題は金髪の少女——アリスⅡRと名乗る少女である。明らかにリインに敵意をむき出して自己紹介の時も敢えて言わな

くとも良いことを言つてそのままその場を去つていった。当然リインは落ち込み、周りのクリアたちは苦笑せざるを得なかつた。

「……もしそちらさえよければ、僕たちと一緒に行動しないか？　女子だけで此処をうろつくのはいささか危険だと思ふんだが……」

「——いや、気持ちはありがたいが遠慮しておこう」

「な!?　しかしッ……『あーそりや残念。せつかく女子と組めると思つたんだが、断られちまつたらしようがねーか』クリア!?　君まで何を言っているんだ!?」

「まあ、落ち着けよ。じゃーな、ラウラとエマ。プンスカ怒つて先に行つちまつたお嬢とはぐれるんじゃないぞー」

半ばからかい気味に言うクリアにラウラとエマは苦笑しながら、先に行つてしまつたアリスの後を追うようにしてクリアたちの元を去つていった。しかし、マキアスはクリアの行いに納得がいかないようでも彼に詰め寄り

「どうして彼女たちだけで行かせたんだ!　君も魔獣が危険であることは重々承知だらう!?　此処は、多数で固まつて行動したほうが……」

「危険は少ないつてか?　まあ、そりやそうだが」

「だつたら何故!」

「アホか。お前」

ポコツと軽くマキアスの頭が叩かれる音がする。突然のことに面食らったマキアスだが、すぐに正気に戻りまた怒鳴り出す。その様子をリインたちは唾然としながら見ていながらも口を挟もうにも挟めない状況であることから何も出来ずにいた。クリアはというと、怒鳴り散らすマキアスの声を売るさそうに片手で耳を塞ぎながら、呆れたように

「ラウラ達と行動するってことはラツキースケベを発動したリインとその被害者であるお嬢…アリサも共に行動するってこつた。リインに他意はなかったとは言え相手は年頃の女子だ。事故だとしても自分の胸に顔をうずめた相手と行動するってのは抵抗があるだろ……多分」

「それは、そうかもしれないが…」

「そんな状況で共に行動してみろ？ うまく連携が取れるとは俺には到底思えないね」

「む……」

「それにアイツ等なら大丈夫さ。特にラウラ……アイツは恐らく俺たち《VII組》最強だろうな」

「ああ、間違いないだろう。なにせ帝国に双璧をなす《ヴァンダール流》の対の剣術《アルセイド流》の使い手だ」

「「え、ええ!?!」

「」

クリアとリインから衝撃の事実を伝えられたエリオットとマキアスは驚愕の声を上げる。ガイウスは成程といった感じで納得している様子を見せている。多方、ラウラの実力を感じ取っていたのだろう。

「あ、アルセイド流って帝国屈指の実力者《光の剣匠》ヴィクターⅡSⅡアルセイド子爵の!？」

「ああ。彼女も名乗っていただろ？ アルセイドって」

「た、確かに言っていたが…まさかあの」

「そんなに有名なのか？ 確かにラウラ自身からはかなりの実力を感じたが」

「まあ、有名っちゃあ有名だな《光の剣匠》は……ぶっちゃけ、有りえない程の実力者だしな」

四大名門のことを知らなかったクリアだが、光の剣匠…ヴィクターⅡSⅡアルセイドの事は知っているような口ぶりだった。しかし、ラウラがその《光の剣匠》の娘だと知った衝撃の方がエリオット達には大きかったらしく、クリアの眩きは誰にも届いていなかった。

「と言う訳だマキアス君。これで安心したかね？」

「あ、ああ。それ程の実力を持った彼女がついていれば、安心だ…と言うか何だその喋り方」

「ま、そうは言いつつも『もしも』の事があつたら心配だし、俺がフォローに行ってくるわ」

「お、おい!? 僕の質問は無視か!? しかも、さつきと言っていることが全く逆じゃないか!?」

「細かいことは気にすんなよ石頭。『もしも』の事があつたら保険のためだって言つてんだろ?」

石頭と呼ばれたことにショックを受けているマキアスをよそにクリアはラウラたちが進んでいった方向へと歩き始めた。その様子に少し違和感を覚えたリインだったが、その違和感を埋め込むように

「クリア、彼女たちのこと頼んだ」

「……おう、もしかしたら余計なおせっかいかもしれないけどな」

と、振り向くことなくヒラヒラと手を振ってさらに進みだす。その時のクリアの表情はリインたちからは見る事ができなかつたが、まるで『重い足枷が外れたとでも言うような開放感溢れた表情』をしていたのだが、それを彼らが知る由もないのだった。

a c t 0 4

リイン達と別れた後、クリアは己の獲物であるブレードライフルを肩に担いでのんびりと歩いていった。時折現れる魔獣は肩に乗せたブレードライフルで屠り、先へと進んでいく。

「はあ……メンドくせえ」

クリアはそう言いながら次々に襲ってくる魔獣を己の獲物で切り伏せ、周りを囲まれれば銃弾を囲んでいる魔獣相手にばら撒き、それで体制を崩した魔獣から次々に屠っていく。襲ってくる魔獣の攻撃を紙一重で避け、ブレードライフルを持つている手とは逆の手で制服の中に隠していたナイフで魔獣の頭を切り落とす。そんな事が数十分かはたまた数分か分からないが続いたあと、そこには魔獣の死骸とクリアが一人立っていた。

当の本人である、クリアはというと、多数の魔獣を倒したにも関わらず息を切らすこと無く立っている。その様子はどこか物足りなさそうにしているようにも見えた。

「ま、所詮学院内の魔獣って訳だし雑魚でも、仕方ねえか」

ぶつくさ言いながらもクリアは進んでいく。しばらく進んでみるとクリアが進んで

いる方向から剣戟のような音が響いている。女子のチームだろうかと足早に進んで行くこうとして、ある気配に気付き足を止め、この部屋を支えている柱の一つを睨んで

「バレバレだぞファイー」

「……やっぱり、クリア相手に気配を隠すのは難しい」

睨んでいた柱から出てきたのは先ほど広間ほどの広さがあつた部屋でラウラの誘いを無視して先に進んでいったファイーが居た。

「…ま、前よりは精度は上がつてたと思うぜ？ まだまだだけどな」

「褒めるのか落ち込ませるのかどっちかにして欲しい」

「ま、精進しろつてこつたよ。……で、最奥見てきたんだろ？」

「ん。そう遠くないところに上に続く階段があつた。多分そこから上がれるけど…」

「何かありそうだったつてか？」

クリアがそう問うとファイーは静かにコクリと頷く。その答えはクリアも予想できていたので、驚きはなかった。寧ろ、『あの』サラのことだ。何も無いと言うことは無いと踏んでいる。

「…あの人のことだから簡単には終わらせてくんねーんだろうな。…はあ、メンドクせえ」

「同感。サラもめんどくさい事をする」

クリアたちが奥の方へと到着すると、そこでは既に戦闘が繰り広げられていた。少し大型の魔獣をクリアたちを除く全メンバーで戦っているのだが、どうも有効打を与えられていない様子だ。

「俺らが一番最後かいな」

「だね。左右から奇襲をかけるよ 遅れないでね」

「ハ、フィーこそ遅れんなよ？」

リンたちがひるませた魔獣に向かってクリアとフィーはそれぞれ左右に分かれて魔獣を挟むようにして接近していく。

そして、魔獣が体制を立て直そうとしたまさにその直後に、フィーが自分の獲物である小銃剣から導力弾を打ち出し動きを鈍らせ、そこにクリアがブレードライフルを魔獣に向かい振り下ろす。魔獣は醜い悲鳴を上げながらクリアが居た場所を尻尾でなぎ払うが、それを読んでいたかのようにクリアはバックステップでそれを回避して離脱したところをユーススのアーツが魔獣を襲うが、あまり効いたようには見られない。

「げえ、メンドクせえ程タフだな」

「ああ、さつきから何度も攻撃しているんだが、正直有効打を与えられた気がしない」

「どうする、このままじゃ不味いぞ」

「と言つても、どうもできないじゃないッ！」

疲労が限界に来ているのか、既にチームワークと呼べるような連携は取れなくなっており、殆どが個々人の攻撃で何とか魔獣を怯ませる程度になってしまっている。会話ですら互いの意思疎通ができなくなっている状況だ、早々に何とかするべきだろうとクリアは考えてはいるのだが、何も思いつくことはない。

そんな中、

「一旦、落ち着こう。恐らく、あの魔獣は俺たちが、連携しないで倒すことは殆ど無理だろう。きつと、教官もその事を見越してあの魔獣を此処に置いてあるんだ。それなのに俺たちが争っていたら、倒せるものも倒せないと俺は思う。だから、此処はみんなであまく連携をとって、あの魔獣を倒そう。俺たちはまだ始まってもないんだ。始まってもないのに終わるのは嫌だろう？」

そんな、ラインのセリフを聞いていたメンバーたちは一瞬硬直したように黙った。そして、一番最初にクリアが大声を上げて笑い始めた。

「フクツ……ハハハハっ！　　リイ、おめ、どんだけ恥ずかしいこと言つてんだよ！　クサいわ！」

「なっ」

「確かに。クリア程大爆笑するのもどうかと思うが、ラインのセリフも体外だな」
「聞いているこつちが恥ずかしくなってきたよ」

と言われ、思い返してみると自分でも漸くどれだけ恥ずかしいことを言っていたのか理解し、顔を真っ赤にして黙り込む。が、戦闘中なので立ち止まる、なんて自らのなるような愚かな真似だけはしないが。

「……だが、確かに私たちはまだ何も初めてはいないな」

「ええ、教官に一言文句言ってやらないと気がすまないわ。それに個人的にも聞きたいことがあるしねッ」

「私も気になることがあるので此処で諦めるわけにはいきませんね」

先程まで折れかかっていた心がラインの言葉で再び力を得たようにメンバーの勢いが増してきた。それこそ、先ほど攻撃を加えていた時よりも、だ。

そして、唐突にクリアたちⅦ組のメンバーの体が青白い光に包まれる。それぞれが青白い光に包まれていることに驚きを隠せないでいるが、現在は戦闘中で一瞬の気の油断が致命的な隙になりかねないため、動きを止めることなく魔獣へと向かっていく。

「エリオット、マキアスッ！」

「うん！」

「任せたまえッ！」

リインを含むエリオット、マキアスが先行して魔獣に攻撃を仕掛ける。マキアスが武器であるショットガンを魔獣にめがけて撃ち込み、怯んだ好きにリインが刀で切りつけ、続けざまに詠唱を終えたエリオットのアーツ《アクア・ブリード》が魔獣を捉える。

■■■■ーッ!!」

連撃のダメージは流石に効いたようで、魔獣は悲鳴のような咆哮を放つ。

「くっ、なんて咆哮だッ」

「耳がッ」

「ちと、五月蠅すぎんじゃねーのッ!?」

直接的なダメージは皆無だが、あまりの大声にクリアたちは一瞬怯んでしまう。魔獣がその好機を逃すはずもなく、一番近くに居たリイン達にしつぽを叩きつけた。

「グッ!」

「ぐはっ!」

「うわああっ!」

当然、咆哮で怯んでいたリイン達は防御をしようとするが、間に合うことなく魔獣の尻尾を叩きつけられ、後方へと飛ばされる。

「だ、大丈夫!」

「ち、治療します!!」

「あ、ありがとう」

「ぐ、すまない……」

「流石に、効いたな……ッ」

アリサとエマが治療に向かうと同時に止めを刺そうと魔獣がリイン達の方へと向かうとしたところに、跳躍したフィーとクリアによる上からの一撃で魔獣はなすすべもなく地に伏し、リイン達への追撃は妨害される。

「ハッ、そう簡単にさせるつもりじゃあなよ」

「舐められてるみたいで、気に食わないね」

「さて、このクソ魔獣。まだまだ勝負はこれからだぜ?」

地に伏す魔獣にブレードドライフルを向け不敵な笑みを浮かべてクリアはそう告げる。魔獣の方も、心なしか目つきを鋭くしてクリアを睨んでいるように感じられた。

a c t 0 5

「ツチ、つんとにメンドくせえなあ……つと」

「■■■■■■■■!!」

魔獣がしつこく繰り出す攻撃をクリアは武器で防いだり、避けたりして直撃こそしていないが、あちこちに軽い傷を負っている。先ほどの挑発で、他のメンバーに攻撃は行かなくなった代わりに集中してクリアに攻撃が行くようになったのだ。

「口は災いの元つて確か、東方の国のことわざつてやつにあつたよなあ！ 今がまさにその状況つてか……笑えねえ」

「口ばかり動かしてる暇があつたらちゃんと引きつけておいて頂戴つ!!」

「へいへい、わかつてますよつと……全く、人使いの荒いお嬢だこと」

余裕綽々のように軽口を叩いてはいるものの、今まで疲労という疲労を感じていなかったクリアも流石に疲れが出始めたのか、最初よりも動きが鈍り、息も荒くなっている。

クリアだけに負担がいかないように、リンやガイウス達前衛組が魔獣に攻撃をしているのだが、それでもリン達の方に攻撃が行くことはなく、クリアへと攻撃を仕掛け

る。

「ちっ……」

「クリアっ!？」

ついにバランスを崩したクリアに魔獣の攻撃が襲いかかる。咄嗟に後ろに身を引いてダメージを逸らしたが、それでも勢いが強く、クリアは後方の壁へと叩きつけられる。「いっつつ……洒落になんねえ力してんのな……」

「大丈夫か？」

「おう、サンクス。助かったわ」

ガイウスがクリアの補助をする。幸いにも、寸前で身を引いていたので直撃よりは半分ダメージを減らすことができたようだが、それでも体に蓄積されたダメージもあり、やはり最初のような動きはできず、一撃離脱で攻撃を繰り出すのが関の山になっていた。

「クリアは援護に回ってくれ、俺たちが前衛をやろう」

「……わりい、頼むわ。流石にしんどい」

「どうせなら、そこで休んでいるといい。貴様が休んでいる間に倒してやる」

「ハ、そりゃいい。じゃ、遠慮なくらくさせてもらっておくぜ」

クリアのその言葉を満足げに聞くとリイン達は魔獣に接近して、攻撃を繰り出す。魔

獣の方も漸くというべきか弱ってきたようで、動きに鈍りを感じた。エマ、エリオットはアーツを中心に攻撃・補助を行い、アリサ・マキアスが銃・弓による中・遠距離の攻撃を繰り出し、ライン達前衛組が魔獣の攻撃を避けながら攻撃を行うフィーは状況に応じて中距離と近距離で立ち回っている。そんな中、クリアも

「……射撃はあんまり得意じゃねーが、このまま何もしないつてのも、癪だからな」

そう呟きながら己の武器であるブレードライフルを構え魔獣に向けて放つ。それに魔獣はのけぞり、動きを一瞬止めてしまう。そして、その一瞬を集中力が極限状態まで高まっているⅦ組のメンバーたちが見逃すはずもなく、

「よし！ 特大の行くよっ!!」

そう言つてエリオットが放つたのは水属性上位に当たる導力魔法《クリスタル・フラッド》。魔力でできた氷が魔獣を凍てつかせ動きを封じ込める。当然、魔獣は体を凍てつかせる氷を破壊する術を持っておらず身動きを取れないまま咆哮を上げようとするが、

「今だっ!! 頼むラウラっ!!」

「ああ、任せるが良いッ!!」

身動きの取れない魔獣の頭を自身の武器である大剣で叩き切る。すると、ゴトリと少し鈍い音を響かせて魔獣の頭は地に落ちる。魔獣の頭が、地に落ちたと同時に体は元の

石へと戻り動かなくなってしまうた。

「……………やった、のか？」

「みたいですね……………」

「こ、怖かったー」

魔獣を倒したことを認識すると、メンバー達は腰が抜けたかのようにその場に座り込む。誰もがボロボロで汗だくになっている。

「それにしても、さっきの僕たちを包んだ光はなんだったんだ？」

「確かに気になるな……………この戦術オーブメントから出ていたように感じたが」

「それに、あの光に包まれているとき妙に力が湧いてきたというか、なんか不思議な感じがしたわ」

「ARCCUSから出た俺たちを包む光……………もしかしたら、アレが」

「そ、貴方たちが体験したあの現象こそARCCUSの真価の一つね」

ラインの言葉を引き継ぐように聞こえてきた声。それは紛れもなく、クリア達Ⅶ組のメンバーを此処に落とした張本人……………サラ・バレストイン教官の声だった。

「ん〜♪ いや〜やっぱり最後は友情とチームワークの勝利よね。うんうん、いろいろあったけどお姉さん感動しちゃったわ。それになかなかカッコいいこと言うじゃない。

ライン」

「ぶ、おねーさんって柄じゃね……だっ!?」

「うっさいわよ、クリア。せっかくだから水を差すんじゃないの」

「……………へーい」

ヘラヘラしながら軽口を叩くクリアにサラはどこに隠し持っていたのか分からないが、棒きれのようなものをクリアの額めがけて投擲する。クリアもクリアでそれを避けるような動作はせず、敢えて当たる……というよりはさすがに疲れていて避ける気力もなかつただけのようだが。

「……………単刀直入に聞く。バレストイン教官、特科クラスⅦ組……その真の目的とはなんだ。まさか、身分に関係なく仲良くしましょう、というだけではあるまい」

「まあ、その考えもないわけではないんだけど……やはり、一番は貴方たちが持っているその新型戦術オペメント《ARCS》の適合率がずば抜けて高かつたってことね。貴方たちが体験したあの青白い光……アレは戦術リンクと呼ばれる今開発のものでね……究極的にはその戦術リンクでお互いの考えを読み取り、連携の強化を図ろうつても。アンタたちも体験したと思うけど、戦術リンクの力は中々強みになるわ」

「……確かに、あの青白い光に包まれているとき、みんなの攻撃する場所が手に取るように分かつた気がする」

「ええ、これが使えれば少数による精鋭部隊が誕生しますね……」

エリオットやマキアス達は納得したように手に持つている戦術オーブメント《ARC US》を見つめているが、クリアはどこか納得していないかのようにサラを見ている。サラもそれに気づいていながら、敢えてその視線を無視して話を続ける。

「ま、オリエンテーションも無事終わったことだし、そうね。約束通り文句を聞いてあげる。トールズ士官学院はこのARCUの適合者として君たち10名を見出した。やる気のない者や気の進まない者に参加させるほど予算的な余裕があるわけじゃないわ。それと、本来所属するクラスよりもハードなカリキュラムになるはずよ。それを覚悟してもらった上で《VII組》に参加するかどうか——改めて聞かせてもらいましょうか」

そう聞かれ、誰もが黙り込む。それを見て、言い忘れていたことを付け加えるようにサラは

「そうそう、別に参加しない場合は元々振り分けられるクラスハズだったところにちゃんと入れるから安心しなさい。平民なら平民のクラス、貴族なら貴族のクラスに、ね」
が、誰も一言も言わない中、目を閉じて考えていたリインは静かに目を開き、サラを見据えると信念の通ったような待つくすぐる声色で

「——リイン〓シユヴァルツァー。特科クラスVII組に参加させてもらいます」

「リイン!？」

「……へえ」

「一番乗りは君かあ……何か色々事情があるみたいね」

サラは含みのある言い方をしてリインに問いかける。が、リインは静かに首を横に振り

「いいえ、俺の我が儘で行かせてもらった学院です。自分を高めるためならどんなクラスでも構いません」

「ふくん、そつか。分かったわ。他はどうかしら？」

サラに促されるが、まだ他のメンツは決めあぐねているようで、黙り込んでいるまま。そんな中、クリアが一步前に出て

「んじゃ、俺もやるわ。クリアⅡヴィルヘルム特科クラス《Ⅶ組》参加させてもらうぜ。

他のクラスにいるより、面白そうだしな」

「…アンタなら、そういう理由だと思っていたわよ。全く、面白半分でやるようなことじゃないってわかってるくせに…」

「ハハー、わりイわりイ。コイツだけは性分だからどうにもなんねえんだよ」

「ま、いいわ。次…」

また、サラが促すと今度は決まったようで次々に参加の意思を伝えていく。そして、ファイの番になると、彼女はめんどくさそうに

「サラが決めていいよ」

「ダメに決まってるでしょ」

「……ちつ。じゃ、クリア。決めて」

「とんでもねえキラークラスだな、オイ」

「あのねえ……自分でちゃんと決めるって約束でしょうが」

呆れたようにサラはそう言いながらフィーを諭す。その姿はさながら年の離れた姉妹にも見え、Ⅶ組のメンバー達はどこか温かい目で見守っていた。

「む……めんどくさいなあ。じゃあ、参加でいいよ」

本当にめんどくさそうに参加の意思を告げる。……やる気がないわけではないようだが、別段やる気に満ち溢れているという様子でもないことから、参加でもそうでなくともどちらでもいいと思っていたようだ。

その後、ユースとマキアスもいがみ合いながらではあるが、Ⅶ組参加の意思を告げる。まあ、いがみ合いと言っても一方的にマキアスが嘯み付き、それをユースが簡単にいなしていただけなのだ。

ユースス本人としては、此処に来る前にクリアに向かつて言った言葉の方が学院に来たからの何よりの本心であり、Ⅶ組に参加することの根幹とも言えるかもしれない。勿論、他にも理由はあるのだろうか。

こうして、Ⅶ組は無事誰一人欠けることなく正式に設立されたのだが、色々と問題が

立ちふさがる。前途多難な設立のようにも感じられた。



そして、オリエンテーションがあつた日の夜のこと。クリアはⅦ組に宛てがわれた第三寮館の屋上で酒を飲んでた。部屋で飲んでいれば確実に見つかつてしまい、説教の後、サラに酒を奪われてしまうことを理解していたため、屋上で飲んでいたので。

「あー……今日は疲れたな。けど、面白い奴もいたもんだな」

そう言いながら、ユーシスのことを思い出す。四大名門という大貴族の嫡子でありながら、固まった考えを持っていないところには好感が持てた。性格に難が有るようだが。

「懐かしいなあ……俺に噛みついてくる奴なんて、『アイツ』くらいなもんだつたからなあ……」

そう思いながら、クリアが思い出すのはここに来る前の自分がいたところのこと。捨てられて身寄りのないクリアを拾ってくれた『あの人』がリーダーだった、クリアのたつ

た一つの居場所。

その居場所も、『あの人』が死んでしまい、そこにいる意味を見いだせなくなり去ってしまったわけだが。

「……いけね、感傷に浸ちまったな。せつかく、旨い酒なんだ感傷に浸つてまづくなつたら元も子もねえな」

「あら、確かにこの酒うまいわね」

「だろ？ 値段もそこまで高くねえのに、この旨さ……つてサラさん!?」

「やつほ……感傷に浸つてたクリア君」

おちよくるようにそう言われて、柄にもなくクリアは顔を赤らめる。サラの方はとうとう『してやったり』といったような感じでニヤニヤしている。

「い、いつから？」

「ふふーん♪ ……聞きたい？」

「いや、やつばいいや。どうせ、最初っからいたんだろうし」

「は・ず・れ。途中からよ。ちよーっと、涼みたくなつたから屋上に来てみたら妙に感傷に浸っているアンタが居たってわけ」

「………忘れてくれ」

恥を忍んでそう頼むクリア。流石に恥ずかしかつたのか、はたまた自分の柄じゃない

ことを気にしているのか分からないがその顔は先程と同様赤く染まっていた。サラはサラでグビグビとクリアが持つてきていた酒を容赦なく飲みながら

「んくそうねえ……本来ならこのことで一晩からかい倒すんだけど、いい酒飲ませてもらったし、いいわ。忘れたげる。感謝しなさいよ〜？」

「ぐ……」

「ま、一つ真剣な質問。やっぱり、『あの人』の事割り切れてない？」

言葉を詰まらせるクリアにサラは今までの雰囲気を一変させ、そう尋ねる。クリアもバツが悪そうな表情をして少し顔を俯かせ小さく頷く。

「そっか……アンタが他のⅦ組の子達と話しているの見てなんか壁があるように感じたけど、やっぱりそれは間違いじゃなかったか……」

「もう、結構経つけどさ……やっぱり、割り切れねえんだわ。過ぎたことに囚われてちゃ前になんか勧めねえって分かってんだけどよ。」

そう言いながら、クリアは立ち上がり、寮の中へと戻る階段のほうへと向かっていく。「ちよつと、クリア。この酒どーすんのよ？」

「ああ、ちよつともう飲めねえから、サラさんが飲んでてくれ んじゃ、おやすみ……」
引き止めることもかなわず、クリアはそのまま階段を下りていった。



その姿を見送つてサラは軽くため息を吐くと、

「全く……何がもう飲めない、よ。私より酒強いくせに」

不満げにそう呟いてクリアが残していった酒を一気に飲む。少しアルコールがキツかったためか喉が熱い。

「ほんつと……ままならないわねえ」

一人夜空を見ながらそう呟く。彼女の心持ちとは裏腹に夜空を星たちが綺麗に彩り、此処トリストア……引いては帝国を照らしているのだった。

第一章 初めての實習

a c t 0 6

トールズ士官学院の入学式及び特科クラス《Ⅶ組》の成立から早、二週間の月日が経った。最初は慣れないことや戸惑うことが多かったクリア達だが、二週間もすると慣れたようで、何のトラブルもなく学院生活を送っていた。そして、ある日の午後のHRでサラは

「……そろそろ学院生活にも慣れただろうし、頃合でもあるから今日から自由行動日を挟んだ二日後、実習テストを執り行うわ。そしてそこで改めて《Ⅶ組》のカリキュラムについて説明するわ」

「！ ようやくか……」

「ど、どんなのなんだろう……」

今までは他のクラスと同じカリキュラムを受けてきたⅦ組のメンバー達だが、漸くⅦ組の特別カリキュラムを受けることになる。聞いて好奇心を覗かせるものは少なくともない。

「つてなわけだから、自由行動日をどう活かすかも君たち次第ね。遊ぶもよし、テストに

向けて己を磨もよし、好きにするといいわ。……あ、あと部活動もいいかもしれないわね。今日から部活動に所属できるようになるわ。ま、頑張りなさいな」

そう言うと、サラは副委員長であるマキアスに号令を促し、HRが終了する。すると、その直後にガイウス、エリオットはラインと、エマ、アリサ、ラウラはそれぞれの部活に所属するのかと会話に花を咲かせ、フィー、マキアスはそくささと教室を去っていく。そんな中、クリアとユーススは

「なー、ユーススはなんか部活に入んのか？」

「ふん、なぜ貴様にそのようなことを一々言わねばならん」

「いいじゃねーか。あっちみたいに俺らも部活話で盛り上がるうぜ？」

「部活話があったのであればアイツ等してくればいいだろう。大体、なぜ俺なのだ？」

「

……ま、気分だな」

「今すぐ、あっちの会話に混ざって来い」

シシシと笑いながらふざけた回答をするクリアにユーススは青筋をこめかみに浮かべながらそう言う。そのやりとりはライン達やアリサ達にも聞こえていたようだが苦笑をしていた。

「でも、よく物怖じしなくて話せるよね。……僕だったらちよつと無理かなあ……」

「ああ、俺もあそこまで露骨に近づくな、といった雰囲気を出されるとちよつと話しかけづらいな」

「そういう点で、見るとクリアって結構すごいのか？」

「や、じよ、冗談だからそんなに怒るなって……」

「貴様の冗談は質が悪い上に、冗談に聞こえん」

平謝りをしているクリアを見てリインは自分の言ったことを撤回したくなった。：まあ、周りも周りでそんな訳あるはずもないか、と思つたようだが。

「……フン、付き合つてられん」

そう言つて、ユーシスは席を立ち上がり、教室の出入り口の方向へと向かつて行つた。

「あちやー、ちとやりすぎたな」

「流石に、な」

クリアの呟きにガイウスが同意するようにそう言う。が、ユーシスは教室を出る直前で

「……………馬術部の見学に行く。来ると言うなら別に来ても構わん」

「クク……………はいよ」

素直に言えないユーシスに苦笑しながら返事をするクリア。それを聞き届けると、今

度こそユーシスは教室を去っていった。その際、耳まで真っ赤になっていたのは羞恥心からだったのだろう。四大名門の子息であるというプライドから先ほどの言い方が最大の譲歩だったのだろう。

「本当仲いいよねクリアとユーシス」

「んー、まあそうだな。仲いい方ではあるか」

「? クリアにしては珍しいな。てつきり、『だろ? 俺たち親友だからな』とかいいうかと思ったが……」

「……………色々あるんだよ。おにーさんにはな」

「おにーさんって……………同じ年だろう」

「さてな。案外年上かもしんねーぞ? 」

からかうようにそう言い残して、クリアも教室を出ていこうとする。が、一瞬、本の一瞬であるが教室を出ようとするときのクリアの表情が全て抜け落ちたかのような無表情をリインは見た。咄嗟に呼び止めようとしたが、それより先にクリアが教室の外に出たので、それは叶わなかった。

追いかけて聞こうとしたが、クリアのことだ上手くはぐらかせてその場をやりきられると思ったリインは追いかけることを断念した。これからまだ時間はたっぷりある、また、機会があるときに聞けばいいかと判断し、エリオット達と会話を再開した。……………会

話を再開させる前に変な顔をしていたのかエリオットとガイウスに訝しげに見られたが。



教室を出たクリアは宛もなくフラフラと学院内を見て歩いていった。ユーシスのいるであろう馬術部の方へ行く前に、学院内を歩き回ろうと気分で思い、そちらを優先した。

「はー……入学して二週間経つけど、相変わらず広えなー。迷子とか出るんじゃないかねだろっか？」

「むぎゅッ!？」

そんな事を呟きながら歩いていると、軽い衝撃が胸のあたりに走り、ぐぐもった声が出た。その事に驚いて少し視線を下げてみれば、平民クラスの緑の学生服を纏った茶髪の中性的な顔立ちをした学生がクリアの胸当たりに顔をぶつけていた。

「わりい……よそ見してたわ。怪我、ねえか？」

「いたた……うん！ 怪我はしてないよ」

「そうかい。ぶつかって悪かったな　じゃ」

「あ！　待つて待つて！　やっぱり怪我したかも！　これは何か奢つて貰わないとダメかも……」

「嘘くさ」

必死にそう言う学生を不審な目で見ていたが、唐突に大きなお腹の音が渡り廊下に鳴り響く。……原因となった人物は言わずもがな恥ずかしそうに顔を赤らめていた。因みに余程お腹がすいているのか涙目になっている。

「……はあ。仕方ねえな」

「ほへ？」

「……何か奢つてやるよ。ここで会ったのも、何かの縁だろうしな」

「おお！　ありがとうー!!　……えっと、」

そう言つて学生はクリアの両手をとつて自分の小さな手で包み込み、ブンブンと激しく降つている。こんな感じの対応をされたのはクリアも初めてだった様でその表情には少し戸惑いが見られた。

「クリアだ。クリア＝ヴィルヘイム……お前は？」

「僕？　ナイラ・アルアジフ！　ナイアでいいよクリア。あと、よく女と間違われるけど、れつきとした男だからねくまあ、間違えれたからつて怒る訳じゃないけどね」

「へいへい。よろしくなナイア」

「えへへー！ こつちこそ（ご飯）よろしくねクリア！」

笑顔で再びブンブンとクリアの手を掴んで振っている。……クリアとしてはさっさとこの学生……ナイアに飯をおごっておさらばしたい気分なのだが、この嬉しそうな表情を見ていると、どうにも話が切り出しにくいようだ。もし計算してやっているのであれば相当な役者だろう。

そんな事を考えながらクリアは食堂のほうへと引つ張っていくナイアを見ているのだった。……しかし、この後クリアはナイアに飯を奢るといったことを大いに後悔する羽目になるとはこの時は思ってもいなかったのである。



「……………」

「んー！ 美味しいーッ!! あ、これも追加してもらっていいですか!？」

食堂について、メニューを選び出したまでは良かった。しかし、そこから先は全く

もつての予想外だったクリアは絶句するしかなかった。次々に食べてはまた追加の品を頼む。その繰り返し返してクリアは5回を超えたところから数えていない。考えていることといえればあの小さな体のどこにそんな吸収力があるのだろうかという事だけだった。

「あー、幸せえー……アレ？ クリアは何か頼まないの？」

「……ぜつてえ次からお前と食事しねえ」

「ええ!? な、なんで!？」

「イヤイヤ、お前人の金でこんだけ食べてんだぞ!? ちつたあ遠慮しろ！」

「えー……まだ食べ足りないよー」

「んなの知るか！ 俺の金が無えんだよ！」

そう言つて無理やりメニューを選んでいるのを止めて支払いを済ませる。その際、ナイアの表情はとも不服そうだったが、クリアはそんなことを気にしている余裕がなかった。……なにせ、財布の中に入っている金の9割を持つていかれたのだから。

「おう。俺の財布がずいぶん軽くなったなあ……」

「えーつと、クリア？」

「え？ ああ、大丈夫大丈夫、何とかなる……何とかするさ」

遠くを見ながらクリアはそう言うわ言のように呟いている。いつもの飄々とした態度

が嘘のように暗く沈んでおり、目も虚ろになっている。正直に言えば相当怖い。隣にいるナイアも若干怯えている。

「ご、ゴメンなさい……僕が調子に乗って食べ過ぎたから……」

「……はあ。もう過ぎだ事だ。気にして……入るけど、ま、大丈夫だ」

「で、でも……」

「奢った俺が大丈夫って言ってた。あんま気にされると、こつちもあんまい気になれねえよ。……そうだな。もし引け目を感じてんなら、これは貸一だな。いつか返してくれればいい」

申し訳なさそうに俯いているナイアの頭にぼん、と手を乗せ乱暴に撫でながら言う。いきなりなことだ驚いたのか、目を丸くしてなされるがままになっていたが、嫌ではないようであった。

「……うん。分かった、きつと返すよ。で、またこつちが大きな貸し作ったらまた、奢ってくれる？ 今度はクリアも一緒に食べてさ」

「……ハ、おう。ただ、今度は少しは加減しろよ？」

「その時のクリアの態度次第だね」

ニヒヒ、と悪戯っぽく笑うナイアの表情にはもう先程までの落ち込んだ様子はない。何時までも、辛気臭い顔をして相手に迷惑かけるのが嫌だったのだろう。クリアには

経済的迷惑をかけたわけではあるのだが。

「…言つとくが、この貸しはデカいからな？　ちよつとや、そつとじゃ返せると思わねえこつた」

「分かつてるよ。…何か、困っていることがあつたら呼んでね。出来る範囲で力になれるように頑張るからさ」

「そいつは楽しみだな」

そう言いながら、食堂に備え付けてある時計をふと見ると既に時間は既に学生たちが完全下校する時間寸前だった。クリアはどうりで少ないはずだと思いつながら、ふとあつたことを思い出した。

—— 馬術部の見学に行く。来ると言うなら別に来ても構わん ——

ユーススの言葉。一件冷たいように見えて、彼が友人であるクリアに最大限の譲歩としていった事、クリアはそれをすっかり忘れてしまっていたのだ。たかだか友人だから謝れば済む、のかもしれないが、ユーススは普通以上に気難しい性格をしているためどうなるかわからない。

そう考えたクリアの顔色はみるみると青白く染まっていく。それを不審に思ったナイアはクリアに声をかけようとしたのだが、

「わりい！　ちよつとくら用事思い出したわ!!　じゃな、ナイアッ!!」

「へ？ あ、うん……また今度ねー!!」

疾風のごとく駆け去るクリアに呆然としていて彼の背中が少し見えるくらいになったところで、漸く我に返りそう言葉を掛けるが、届くはずもなく帰ってくるのは虚しい静寂だけだった。

因みにその後、馬術部が活動をしているグラウンドに向かったのだが、誰もおらず寮についたクリアをユーシスが冷たい目で睨んでそれにいつもの体裁を保とうとせずひたすら謝っているクリアをリイン達は見たらしい。

a c t 0 7

大食い学生ことナイアに財布にあるだけの金の分飯を奢らされ、寮内でふて寝していたクリアが目を覚めたのは太陽が真上に上がった頃……詰まる所、昼である。

「ふああ……あー……ねみい……」

モゾモゾとベッドから這い出るが、目の焦点は合っておらず、足取りもフラフラしており未だ目が覚めたとは言いがたい状態だった。フラフラしながら制服に着替えて、一回のリビングへと行き、冷蔵庫の中を開けてみるが、そこには何も入っていなかった……という訳ではなく、材料のみがスペースを取っていた。

「……何にも入ってねえ」

ここで、漸く目が覚めたようでクリアは途方に暮れていた。昨日、ナイアに有り金の殆どを食い尽くされ残っている金といえば、100ミラ程度でそれ以外は財布を振っても決して何も出てこない。猟兵時代に稼いだ金額の殆どは学費につき込んでいたのでまともに使えるミラはほとんど残っていないことになる。

「……取り敢えず、気を紛らわすためにどっか行くか」

そう言つて寮を出て向かった先は……



「え、えーつと……お金がないから、ご飯を食べさせてくれ？ あはは……生徒会にそんな依頼をしに来たのクリア君が初めてだよ」

なんと生徒会室だった。生徒会長の『トワールハーシエル』も初めての依頼に表情を引きつらせていた。それでも笑顔を忘れないのは流石であると言っておくべきか。

「俺だって、こんな惨めな依頼したかねーよ。暴食漢に有り金分の飯を奢らされてなければの話だけんどな」

「暴食漢って……」

「ナイアールアジフだよ。平民クラスの」

「……あー……ナイア君かあ」

トワも納得したような表情で苦笑している。その様子からトワも彼の異常な食欲を知っているのだろう。二人してナイアの食欲について頭を悩ませていると生徒会室の扉がノックされた。

コンコン

「あ、はい。空いてるよ」

「失礼します……あら、お取り込み中でしたか？」

「ううん。大丈夫だよ」

ノックをして入ってきたのは、平民クラスの制服を着た長い黒髪の少女。その手に抱えているのはどうやら生徒会の仕事の書類のようだ。

「……トワさん、こちらの方は？」

「あ、この子はクリア＝ヴィルヘイム君。《VII組》の生徒だよ」

「成程、《VII組》の生徒、ですか……」

トワに『この子』と言われたことによりかなり違和感を感じているようで変な表情をしているクリア。どうやら身長のせいでトワが二年であることを忘れてしまっているらしい。

それと、今入ってきた少女に品定めでもされているように見られているためクリアにとっては相当居心地が悪い。それに気づいたのか、少女は

「あ、ごめんなさいね。近くで《VII組》の生徒を見るのは初めてだから」

「……や、別にいいけどよ」

「自己紹介が遅れてしまったわね。シオリ＝シラサギよ……よろしくヴィルヘイム君

……は少し長いわね。私もトワ会長と同じようにクリア君、でいいかしら？」

「ま、呼び方は好きにしてもらっていいけどよ。…それより、会長殿飯…」

「あ…そうだね。でも、今回だけだよ？」

「恩に着るぜ…」

あはは、と苦笑しているトワは机の上の書類を片付けながらそう言う。対してクリアはぱああと死んでいた表情がみるみるうちに輝きを取り戻していた。それだけ腹を空かせていたということだろう。



「クスクス…」

「…笑い過ぎだと思っんですケド。シラサギセンパイ」

「ゴメンなさい、でも…ふふ、お腹がすいたから助けてくれって…ホント生徒会にそんな依頼したのクリア君が初めてじゃないかしら」

あの後、トワが仕事を終わらせると三人で食堂の方へと向かっていった。その際、シオリにもトワがいきさつを話した結果今に至るといっわけだ。

「もう……シオリちゃんもクリア君をからかうのそこら辺にしといたほうがいいよ」

「ふふ……そうね」

「ふう……からかわれる側の立場は中々辛いな。いつも、からかう側だったから勝手がわかんねえよ。分かりたくもねーけど」

「この際にかからかうのやめたらいいと思うの私だけかなあ……」

「やめたくても、やめられないんだよ 気がついたらつい、な」

「……あれ？ クリア？」

三人で談笑していると、クリアにとつて聞きなれた少女の声がした。声が聞こえた方を見てみると、そこにはフィーが少し驚いたような表情をして立っていた。

「珍しいね。てつきりサラとふたりで朝から飲んでるのかと思った」

「俺サラほど酒が好きじゃねーよ。起きたら飯なかったから会長たちにたかつてるだけだ」

「それもどうかと思うけど？」

「昨日、有り金全部持つてかれたんだよ……」

「また、変な女？」

「やれやれ、と言つたふうに首を横に振るフィーを見てクリアは怒りがこみ上げてきたが、トワたちの手前あまり手荒なことはしたくないのかぐつと堪えていた。それより

も、二人はフィーの言った『変な女』のフリーズが気になつてゐるようだが。

「ちげーよ！　なんでお前は有り金持つてかれたつて言つたらそこに直行すんだよ！」

「前科ありだから」

「ぐ、言い返せねえ……」

「言い返せないの!?!」

「と、とにかく……今回のはマジでちげーんだよ。　いや、変な生徒つてのは違わねーか」

「……どういうこと？」

「えつと……」

変な方向に思考を行かせてしまったクリアに変わつてトワが困つたような表情をしながらか事の顛末を告げていく。聴き終わると、フィーは心底呆れたようにため息を吐いてクリアに一言

「バカ」

と言つた。しかし、多少の自覚があるためかクリアは言い返さずにその言葉を受け止める。……多少はショックだったようで少し落ち込んでゐるが。

「仕方ない……トワ会長。クリアの分は私が払う」

「え、でも……」

「馬鹿な兄貴分の世話役は私だから」

そう言ってトテトテと食堂の受付にミラを払いに行く。その様子に少し、トワとシオリは呆気にとられていたが、復活したクリアが苦笑しながら

「…前からあーいう風なんだよ。フィーは。変に世話を焼きたがるっていうか…なんつーか分かんねえけど」

「そうなんだ…（確信はないけど、それって…）いい妹分だね」
「会長殿までんなこと言うな…」

勘弁してくれ、と言わんばかりに肩をすくめてフィーが戻ってくるのを待っている。それから直ぐに、フィーは戻ってきたが両手に何かを持っている。

「…アイス。知らないの？」

「いや、知ってはいるけど…なぜ？」

「苦労しているってシエフが同情してくれた…ぶい」

「さいですか…」

ペロペロ食べているフィーを横目のため息を吐く。こういうところを見ると、時々利用されているのではないかと思うことがあるが、まあそれも別にいいかと自己完結しているとARCCUSに通信が入る。

「はいよ…」

『ああ、クリアか？』

「おう、そうだが…なんか用か？」

『いや、実はこの前のオリエンテーションで使った旧校舎の調査依頼の手伝いをしてい
るんだが……』

リンが掛けてきた内容を簡潔にまとめると『自分たちだけでは不安だから、少しで
も実力の高いクリアが着いて来てくれると心強い。だから少し力を貸してくれないだ
ろうか』という事らしい。

『どうかな？』

「んー…そうさなあ……」

チラリと横目でフィーやトワたちを見るが、訝しげに首をかしげているだけだ。旧校
舎の調査となると、戦闘は確実に避けられないだろう。今度ある実技テストに向けてい
い練習になるかもしれないが、クリアとしてはただ単純にめんどくさかったため

「や、わりいわ。ちよい用事あるしさ」

『そうか…… いや、用事があるならしようがないな』

「また、今度があつたら誘ってくれ」

『ああ、分かった』

通信が切れると、フィーが真っ先に

「誰？」

と聞いてきた。クリアはふう……とため息を吐くと、めんどくさそうに

「リインから」

「なんて？」

「旧校舎の調査依頼を受けたんだと。それで手伝ってくれないかって言われただけ……って、なんで俺フィーに説明してんだ？」

自分でも無自覚だったのか、説明したあとにそう気づいた。その様子に傍観していたトワとシオリも苦笑を隠しきれていなかった。フィーは説明されて当然といったような顔をしていたが。

「でも、その様子だと断つたみたいだね。……良かったの？」

「ま、いいだろ。どうせ、行っても男しかいないむき苦しいチームだろうから。それなら、こつちで美少女たちとのんびりしていた方が得つてもんさ」

「あら、お上手ですね」

「び、美少女……」

「……はあ」

クリアの発言に三者三様の受け取り方をする。シオリは軽く受け流し、トワは言われ慣れていないのか正面から受け止めて照れ、フィーは呆れたようにため息を吐いてい

る。

「あらー…一人以外受けが良くないな」

「残念ながら、いわれ慣れたるの」

「隣で言っているの聞き飽きた」

「ハハー…どうりで受けが良くないわけか」

一人は間に受けているようで、未だに照れていたがクリアにとって守備範囲外なのか放置している。…：ファイからは冷たい目線を向けられはしたのだが。



あれから、楽しく？ 過ごしたクリアとファイは第三学生寮へと戻ってきたのだが

…

「ただ…酒臭ッ！」

「…っ！」

寮内に漂うアルコールの臭いに思わず二人して鼻を覆ってしまう。その発端である

人物はというと、フロントに備えてあるソファアに座つてテーブルに突つ伏していた。その周りには幾つもの酒瓶が転がっている。

「フイー…アレ」

「了解…」

フイーにアレ…水を取りに行かせている間に、クリアはサラを揺すつて起こそうとする。

「おい、サラさん…起きろつて」

「う、うーん…あら？ クリ、ア？ ……あー…気分悪い 水…」

「フイーに取りに行かせてるから、ほらちゃんと座れつて」

テーブルに突つ伏していたサラを起こしてソファアの背もたれに体を預けるように体を起こさせる。その時に顔を見ることができが、本当に気分悪そうにしており、変に刺激してしまえば淑女があまり出してはいけないようなものが口から出そうなので刺激しないようにしていた。

「つたく… 自分の飲める量くらい把握してんだらうに…」

「つい、ハメを外しちゃつたのよう…」

「なんでんな事したんだか…」

「クリア、水持つてきたよ」

「おう。……ほら、水」

「ありがと……んく、んく」

フィーが持ってきた水を飲んで先ほどの顔色よりもホンの少し良くなつたようだが、未だに少しの刺激を与えてしまえば吐きそうなのは相変わらずである。

「はあ……いやーちよつと飲み過ぎちやつたわね〜」

「飲みすぎたつて……ちよつと待て、サラさんの部屋の酒つてもうほとんど残つてなかつたよな？」

「……さあ？ どうだったかしらねー」

「オイ！ まさか俺の部屋の奴取つたんじゃ……」

そう言つて、クリアはサラの肩を掴んで揺すつた。

「あ……」

「……どうしたフィー……あ」

少し揺すつただけで吐きそうな顔色をしていたサラをクリアは揺すつてしまったのだ。妙に静かなサラの顔を覗き込んでみると彼女の顔色は……見るのも無残なほど真つ青だった。

「うぷつ……も、無理」

「お、おい……ちよつと待て、後10秒……いや、あと5秒でお手洗いまで……」

お知らせ

えーっと、長らく更新しないで突然なのですがこのたびこの作品『緋色の軌跡』を書き直そうと考えています。と言うのも、感想とかでの指摘で矛盾している点とか、自分としても少し書き直したい部分が出てきてしまいましたので、書き直そうと思っています。

その際に主人公の設定や今まで書いていた部分が大幅に変わるところがありますが、そこはご了承していただけると幸いです。

誠に勝手ながらではありませんが、こちらの方は削除して新たに作ろうと思っています。

ホント、今まで書いていた時はプロットと設定が甘かったせいで少し矛盾したところなどが出てきたので修正版？ではそこらへんを重点的にしていきたいと思います。

……あつれー千文字ってかなり多いですねwまだ三百程度しかありませんよwあと700もどうしろと言うんでしょうかw

じゃあ、此処で変わってしまう緋色の軌跡(多分タイトルも心機一転すると思います)

で書こうと思っていたプロットを少し。受けがよかつたらもしかしたら修正版もどきで使うかもしれません。

・主人公を最終的に敵側に回す。(ある思惑を持ってリイン達Ⅶ組と対立)

この構想は早い段階から考えていたんですね。ただ、そのきっかけとなるものを作るのが今作品の主人公の状態では少し難しかったので断念しましたが。それに敵側(解放軍か結社に所属させるか迷っていましたが)にすると発売が発表された閃の軌跡続編を書くのが少し難しくなるのでは、と思ったのも断念の理由の一つですね。

・ヒロイン

ヒロインは散々悩んだ結果どちらかというところではどっちもどっちの状態になってしまったままになりました。……それよりもユースのほうがヒロインぽくなっていった気がしますねwしかも驚いたのは、そのどちらかというところになると圧倒的に閲覧数とお気に入り数が増えてしまうという素直に喜べない状況：そんなにソツチの話が好きなんでしょうかハーメルンの読者の方々は。いや、確かにそういう作品少ないですよ？完全に無いと言えないのが、少し悲しい気がします。ですが、私は断固としてNL派なのであしからず。

というか、書き直す理由の一つでもあるんですけどね。書いてたら何故かホモつけが

ある作品になってしまっていたのでw 私としてはそんなつもりもなかったのですけどねwww

取り敢えずこんな感じで勤めていこうと思っていたんです。ただ、じぶんが思っていた方向とは別の方向へと行きかけていたので書き直す決心をしたという次第です。

重ね重ねですが、よろしければ新しく書き直す作品の方にも目を通していただければと思います。では、良いお年を。来年もよろしく願いますm () m